

社会学年報 *Année Sociologique* 創設百年にあたり、 その歴史的意義を考える*

小 関 藤 一 郎**

I

フランスの社会学年報 *Année Sociologique* がデュルケームや彼を中心とする若手社会学者や彼の教えをうけた新鋭の社会学者たちの協力を得て誕生を見たのは丁度百年前の1888年のことである。社会学がフランスの大学の正式の講座として生れるのはこれより10年程前のことであり、欧米各国の社会学ないし社会科学 *sciences sociales* の機関誌が誕生したのはすべて19世紀の末年であり、たとえば早くから多くの数の社会学者を擁したアメリカの *American Journal of Sociology* は1895年、ルネ・ウォルムス R. Worms の *Revue internationale de Sociologie* は1893年に、さらにイタリアの社会学誌 *Rivista italiana di sociologia* は1897年に創刊されたのに比べて、2、3年の差で1888年に創刊されたことは社会学界史上特筆すべきことである。しかも *Année Sociologique* の場合は他国の類似の名称の機関誌とは異り、フランス学界の正式の機関誌ではなく、デュルケームを中心に集った多くの社会学者の協力によるものであり、しかもそれは協力者たちの研究成果を発表するだけのものではなく、社会学がこれから成長していくために不可欠である先輩隣接科学のあげてきた業績の情報を社会学者研究者に提供してその独自の研究の方針樹に役立たせることを目的としていたものであった。それ故、最初から社会学年報はたんにフランスの学界の活動状況だけを報知することだけを第一の、最大の目的としたものではなかった。その意味でこれは特異の存在

たることを自任してきたのである。この年報の創設百年に当り、われわれはその特異性のもつ意義を回顧して見ることにしたい。それがデュルケームの社会学研究が与えた影響は何であったかを明かにし、さらにはその協力者たちのチームワークの意味などについて立ちいって検討することに役立つと考えるからである。これらの問題はすでに Philippe Besnard をはじめ多くのデュルケーム研究者によって色々の機会にふれられてきたが、ここでは筆者の知る限りでの資料を収集してそれらにおいて言及されなかった点を補っていきたいと考える。ただ当然のことであるが、「社会学年報」は戦後も刊行されているが故に今年創刊百年目を迎えることになるのだが、戦後の年報は第三輯 *Troisième série* となっている。デュルケームにより創刊され彼の存命中の第一次大戦中までのものは第一輯であり、年報はデュルケームの1917年の死去とこの戦争のため刊行を中断され、戦後しばらくしてからマルセル・モースが責任者となり第二輯が刊行されたが、戦争による協力者の著しい減少で1935年頃からは再び中断を余儀なくされ、戦後の第三輯の刊行となったが、その第一回目は1940-1948年をまとめた第一巻が二分冊になって刊行され爾後は新しいメンバーにより続けられ編集の目的も多少異なっている。そこでこの全部について考察することは限られた紙数では到底できないので、以下の考察は第一輯(1898-1917)だけに限定されることになる。

*キーワード：デュルケームを中心とする形究者の協力者集団、国際性、多面性（デュルケームとウェーバーの相互的無意識）、各協力者の強い自主性

**関西学院大学名誉教授